

葛 洪 の 逸 民

下 見 隆 雄

(1)

三世紀後半から四世紀前半の時代を背景として著わされた葛洪の『抱朴子』内外篇に就いては、既に優れた論文が数多く発表されている。従って私ごとき浅学の、改めて鋏を入れる餘地等は有りそうにもない程である。拙稿は、猶残された二三の問題点に就いて、特にその外篇で特徴的な逸民思想を追究することから、内篇の思想に説き及ぶ為の序説である。外篇の内、逸民を登場させて、世俗の生活の中に真の人間の姿があるとして、⁽¹⁾ 隱遁的生活を否定する士と対話させる形式を採るものに、

卷一	「嘉遯」	懷冰先生、起勢公子
卷二	「逸民」	雲台山の逸民 仕人
卷十九	「任命」	居冷先生、翼亮大夫
卷三十五	「守瘠」	潜居先生、或人
卷三十六	「安貧」	楽天先生、偶俗公子
卷四十九	「重言」	玄泊先生、門人

等があげられる。以下各篇の逸民の生活態度を窺うことから、葛洪の逸民論の根底を究明する方向に論を展開していくことにする。

先ず嘉遯篇には懷冰先生という逸民が登場しているが、彼は薄周流之棲遯、悲吐掘之良苦、讓膏壤於陸海、爰躬耕乎斥鹵、に見られるように、世俗の生活を厭い、恵まれた環境から逃避して生活する人である。逸民の特質を考える上で、先ず取り上げなければならないのは、その

価値観である。即ち、逸民の持つ価値基準は、一般的社会人の持つ基準と相反している。逸民は逆転された価値観の世界に住んでいるのである。そのことは、

背朝華於朱門、保任寂乎蓬戸、……譁榮顯為不幸、以玉帛為草土、

と前文に続けて述べられるのを見ても明らかである。華やかな事どもに背を向け、玉帛も価値なきものであるとする点にこそ、逸民に於ける逆転された価値観が端的に表現されているであろう。社会で生活を営む存在である人間が抱く欲求としては、生理的なものの外に社会的・文化的なものが数えられる。社会集団への参加やその中に於ける自己に対する賞讃・尊敬・認知を求めることや、更に支配欲・権威欲等は最も一般的な欲求に相違なく、華美の中で生活し、栄位を得、豊かな環境に在ることは前述の欲求を充足させる最も顕著なものと云わねばなるまい。然るに逸民の欲するものは蓬戸あはらやであり、荒れた土地である。一般的人間の欲求対照は物質面の充足にあるのに対し、彼の求めるものは物質的には最も貧弱な世界である。彼が前述の如き欲求の痕跡を止めているとすれば、それは、生きるに最低限の物質を得るという点に關してのみである。このことは懷冰先生以外の逸民を見ることによって一層明確にされることである。

逸民篇に見える雲台山の逸民は、

混群伍於鳥獸、……世務不拘、故木食山棲

の如く鳥獸に交わり、社会生活を排斥して山に棲んでいるし、居冷先生は、

恬愉静素、形神相忘、外不飾驚愚之容、内不寄有為之心、遊精墳誥、樂以忘憂、

であって、一般世俗の価値概念の裏側に在ることを積極的な楽しみとしている。更に潜居先生は、

慕寢丘之莫争、簡墾土以葺宇、……意忽学稼、屢失有年、飢色在顔、

と見えるように、物質的欲求を隔絶するが故に、所謂栄養失調の状態を呈している。同じく楽天先生も、

進廢經世之務、退忘治生之事、藝漁屢空、朝不謀夕、

と述べて、ネガティブな世界に住んでいることを表わす。玄泊先生は
 括鋒穎而如訥、韜修翰於丹管、……抑蘊華辨、終日弥夕、或無一言、
 と表現されていて、意志通達的手段を用いようとしないうちに、世俗社会に背向
 く姿が窺われるのである。

以上要するに、逸民の第一の特徴は、逆転された価値の環境に在ることを志
 向する人である。

従って、逸民を裏返してみると、彼等は社会生活上の一種の敗北者であると
 云える。然し彼は社会に於ける生活不能者の敗北者とは質を異にしている。何故
 なら、彼は優れた素質と能力を一般世人以上に持ち合わせていると認められて
 いるし、彼自身もそれを自覚しているからである。寧ろ彼は萬民を正しい方向
 に導き、幸福な状態を齎してやられる程の才能も持っている。然るに彼は万人
 の最も望むものを追わず、世俗から離れて在ろうとする。こゝに逸民が敗北者
 たらざるを得ない運命が隠されているし、こゝに逸民を支える葛洪の思想の一
 根源が潜んでいる。それはさておき、逸民の持つ資質の面に関して暫く見てい
 くことにする。

玄泊先生は、金を含み、玉を懐にすと言われ、玄泊先生は、六略を窮覽し、
 河洛を旁綜する学者であり、楽天先生は、言高く、行い方^{ただ}しき人である。又、
 潜居先生は芸文に鋭精なる人とされ、居冷先生は、道遠^なけれども究めざる靡
 く、言微なれども研めざる無き人とされている。また懐冰先生は、赴勢公子
 (2)

今先生操立断之鋒掩炳蔚之文、玩図籍於絶跡之藪、
 と云うのを見れば、やはり優れた学問的資質を具えた学者であると言えよう。

扱て、優れた学問者であるということは、同時に有能な為政補助者たるべき
 素質を持っている。これを證する為に暫く為政と学問との関係を見ることにす
 る。昴学篇に、

夫学者、所以清燈性理、箴揚埃穢、雕鍛欽璞、磨鍊屯鈍、啓導聰明、飾染質
 素、察往知来、博涉勸戒、仰勸俯察、於是乎在、人事王道、於是乎備、進可
 以為国、退可以保己、

と見えるように、学問は国を治める為の第一義である。往かこを察かんさつし来みらいを知るよちすとか、仰あおいで觀てんをかんさつし、俯ふして察ちのりなさつすとかいうのは勿論『易』繫辭伝等に見える文を意識しているのであるがこの力を持つことが為政の必然的原則であり、これは学問の結果體得される能力なのである。こゝから、優れた為政者たる資格は、

(3)
是以賢君抱□□懼不足、而改過恐有餘、謀当計得、猶思危而弗休焉、戰勝地
広、猶戒盈而夕惕焉、…致遠思乎未兆、資春景以暉照、範秋霜以肅、(君道)
に示される如く、広く自然現象を把握することから人間に向けられるべき用心
(4)
深い洞察力を持つことにあるとされている。この能力は学問に依って獲得されるものであるから為政当局者となるべき者は学を怠ってはならないのであり、それは、崇教篇に

帝之元儲必入太学、承師問道、齒於国子者、以知為臣、然後可以為君、……
故学立而仕不以政学、……無術学則安能見邪正之真偽、
と規定されている如くである。学問と為政の不可分の関係は大体以上の通りであるが、こゝで更に取り上げたいことは、為政当局者とその補佐との関係である。

昔在、唐虞稽古欽明、猶俟群后之翼亮、用臻魏魏之成功、(臣節)

雖有稽古之才、而無宣力之佐、則莫緣凝庶績、(審舉)

故招賢用才者、人主之要務也、(貴賢)

と述べられるように、理想的な社会は良き君主と有能なる補佐とを具えて実現されるのである。

この有能なる補佐とは、学問の素養を具えていなければならぬとされる君主を補佐するのであるから、当然彼も優秀なる学問者でなければならない。

そのことは嘉遯篇に於ける赴勢公子の言に、

今先生操立断之鋒、掩炳蔚之文、……若令各守洗耳之高、人執耦耕之分、則稽古之化不建、英明之盛不彰、明良之歌不作、括天之網不張矣、

とあるのによって明らかである。この引用から、更に明らかのように、その補佐とは、具体的には逸民を指しているのである。何故なら、逸民は、先にも述べた如く優秀なる学問者であるからである。

以上逸民の性格に関して二つの特徴を摘出した。それは、(1)逆転された価値意識を持つということ。(2)有能な学者であり、理想的社会を構成することに力を貸し得る人物であることである。

以下、葛洪がこの様な存在者たる逸民を是認する論理の方面へ論を展開したいが、その端緒として今一つ付加せねばならないことがある。それは、葛洪自身が逸民である、ということである。何故なら彼自身が逸民志向型の人物であることを、自叙篇に於いて、

洪之為人也、……而終不辨自矜飾也、冠履垢弊、衣或縑縷、而或不恥焉、……洪期於守常、不隨世變、言則率實、杜絕嘲戲、不得其人、終日默然、と述べ、

貧無車馬、不堪徒行、行亦性所不好、又患弊俗捨本逐末、交游過差、故遂撫筆閑居、守靜壘門、……衣不辟寒、室不免漏、食不充虛、名不出戸、不能憂也、

と語るし、應嘲篇にも、

客嘲余云、先生載宮抱一、韜景靈淵、背俗獨往、邈爾蕭然、……今先生高尚勿用、身不服事而著君道臣節之書、不交於世而作譏俗救生之論、と叙述しているからである。

従って、葛洪が逸民を擁護する一番の原因は、彼自身が逸民であったということに在ると言えよう。

然し、逸民的存在には尙多くの疑問が残されている。その解答の大半は二章以下に譲りたいが、今一応その一點を取りあげて、何故優秀な素質を持ち合せ乍ら逸民は君主の補佐となろうとしないのかの点に関して考察しておく。

審拳篇に、

夫孤立之翹秀、蔽器以待質……蓋鳥鵠屯飛則鸞鳳幽集、豺狼当路則麒麟遐遁と云うのを見れば、葛洪の逸民は絶対的な意味あいでの素質を世に用いまいとするのではなく、むしろ賢君が出て用いられることをさえ望んでいる。それは逸民篇に

吾幸生於堯舜之世、何憂不得此人之志乎、

と述べていることから理解できよう。然し賢君在るも、

馳逐之徒蔽而毀之、故思賢之君、終不知奇才之所在（審拳）

の如くこれを蔽う者があれば逸民の奇才は終に理解されないまゝに存在しなければならぬ。西晋社会の腐敗した現象は俄かには論じ尽くせないが、王沈の釈時論や魯褒の錢神論等にも見えるように、当時の社会を左右するものは権門・党勢・錢物であった。これに就いては葛洪も前掲の審拳篇以外にも外篇全篇に涉って何度も繰り返して取り上げている。即ち、葛洪が逸民を賞し、逸民が己意に現実の人間関係から離れて在ろうとする原因には、当時のこの様な社会の紊乱に対する一種の嫌悪感があったのである。然し嫌悪感・潔癖感は防衛機制の現われであって、葛洪のこの理論を発揚させるものには、一段深く葛洪自身の問題が存在していたと思われる。これらのことを次章以下説明してゆきたい。

(2)

先づ葛洪の生ひ立ちや社会的な位置に就いて考えてみよう。

葛洪の生卒年代には幾分かの問題が存するけれども、一応A D283～A D348としておく。外篇自叙に依れば、彼の父悌は呉国に属する官吏であったが、呉は内政の乱れから、A D280晋の大康元年、司馬氏に降ることとなり、呉人は敗戦国民の側に立たされることとなった。彼の父は続いて晋室に仕えて邵陵の太守となり、洪は悌の第三子として誕生した。下級官吏の子ではあったけれども、彼が被征服国の人間であるということや、文化上の僻遠の地と考えられていた呉国に生まれたということは、彼の存在意識に多大の影響を与えたと思われる。呉蜀の人間が卑しく見られていたことは既に宮川尙志氏も論じて居られる如くであって、陸機や陸雲の例は別としても、呉人が新政下に於いて満足のいく扱いを受けていなかったことは、葛洪自身も、

昔呉土初附、其貢士見偃以不試、今太平已近四十年矣、猶復不試、（審拳）と述べている事実からも十分推測されるであろう。更に、西晋武帝は魏国の崩

壤が帝室の孤立と、自らの司馬氏に依る士族の結合に起因して居たことに深く鑑みて、建国に当っては同姓皇族を封じて国王とした事実からしても、呉人の生存条件は決して良いとは言えなかった様である。呉人という時代の負い目の中で、加えて貧困の生活を体験したことを自叙では

一年十有三而茲父見背、……飢寒困瘁、躬執耕穡、承星履草、密勿疇襲

と述べている。この様な環境で多感な時期を過ごした事実が、葛洪の思想や生活態度を決定するに無関係であったとは言えないであろう。又、葛洪の意識を常に圧迫して居たものに、伝統的な中原文化に対する劣等感があった。それは審拳篇に、

江表雖遠密邇海隅、然染道化率礼教、亦既千餘載矣、往雖暫隔、不盈百年、而儒学之事、亦不偏廢也、惟以其土宇褊於中州、故人士之數不得鈞其多少耳、及其德行才学之高者、子游仲任之徒、亦未謝上国也、

と見えることから十分推察できるのであって、江表が文化的にはどんなに背伸びしても中州の文化的水準からは見下されねばならない歴史的・地理的な運命を荷っていることを、葛洪が意識して居たからこそ、自己がその運命的な集團の人として存在することを何としてでも正統付けたい焦燥感があったものと思われる。彼が、江表の文化も決して中州上国に劣るものでないことを力説すればする程、彼が、自己の置かれた劣等的条件を強く意識していたことを明確にするのである。疾謬篇に、

皆曰、此乃京城上国公子王孫貴人所共為也、余每折之曰、夫中州礼之所自出也、礼豈然乎、

と述べる条にもそうした劣等性を転倒せんとする試みが窺われるし、譏惑篇に、

上国衆事、所以勝江表者多、然亦有可否者、

と言う条も決して例外ではなく、葛洪が置かれた呉人という劣等的位置付けは、彼に江表を擁護させないではおれない衝動を起こさせたものと思われる。内・外篇全般に涉って、会稽上虞の人であった王充を尊崇し、文體までも似せようとしているのはそのことの顕著な一表現である。特に葛洪自身の性格等を

述べるに当っては、『論衡』自紀篇に見られる表現に酷似した文が随処に見られ、自叙に見える

洪體鈍性鷲、寡所玩好、自綵髮垂髻、又擲瓦手搏、不及兒童之羣、未曾鬪雞
驚走狗馬、見人搏戲、了不目眄、

は『論衡』自紀篇の

為小兒與儕倫邀戲、不好狎侮、儕倫好寃捕蟬戲錢林熙、充獨不肯、
等の王充の人となりと自己のそれを同一視する意識の表われであり、同じく
自叙の

口不及人之非、……其論人也、則獨拳彼體中之勝事而已、

言則率實、杜絕嘲戲、不得其人、終日默然、

等も、自紀篇の

口辨而不好談對、非其人終日不言、……常言人長、希言人短、……遊必挾
友、不好苛交、

の表現に非常に近いものがあり、江表を擁護する葛洪は、江表の偉人王充の人
となりを慕い、自分自身がその人となりに近付くことに依って、中原文化に対
する江表の歴史的地理的劣等性を優越性に転換させようとし、同時に、彼自身
の劣等感情を消滅させようとしたのではあるまいか、葛洪が著述の態度として
は王充を範とするのも、これを裏付ける證となり得るものである。⁽¹²⁾

然し、彼が何如に江表の劣等性から自己を回復しようとしても、より優れた
文化に接しようとする時、やはり彼は洛陽を念頭に置かざるを得なかった。自
叙に、

江表書籍、通同不具、

と述べているし、実際に生氣溢れる時代に、彼は洛陽目指して書を求める旅に
出ている。然し乍ら、時方に洛陽を中心とする八王の乱は激烈を極め、望みを
達し得ず、広州へ下ることになる。このことから明白な様に、意識的に中州
に対する妄執を払拭したいと思いつつ、結極は現実の世界に於いては、彼は自
分自身の置かれた環境の劣等性を認めないわけにはゆかないのであった。

これに加えて、葛洪の生存条件を低くさせていたものに、彼自身の身体的劣

等性が有った。それは

而駿野、性鈍口訥、形貌醜陋、

洪稟性尪羸、兼之多疾、

而居少健、恒復不周、

洪體鈍性騫、（以上 自叙）

余所稟訥駘、加之、以天挺篤癡（交際）

等に見られるとおりであり、これ等自己自身の稟性に対する劣等意識が、彼の思想や生活態度に影響を与えなかったとは言えないし、自分自身に就いて述べるを理由として遜辞を考慮に入れてみた所で、彼が自己存在に関して劣等意識を介入させないで居れたと言える程逆転された解釈は成立しそうにもない。

即ち、自己の置かれた環境に就いての劣等性の自覚と、彼自身の持つ人間存在としての稟性に対する敗北意識が、世俗の価値観を逆転する処に思想の出発点を定めたとしても、少しも不思議はないと思われる。更に具体的に言うならば、葛洪には、被征服民としての負い目があり、伝統的に文化の主流であった中原からは隔った辺鄙な環境に存在する集団の人間であるという劣等意識があり、又その集団の中でも自己の稟性に関する对人的劣等意識があった。この三点に於いて、彼は、社会的存在たる人間としては敗北者たらざるを得ない。これ等の各条件を意識する人間の生き方は様々であることができようが、彼は、人並以上の学才を具えていた、否、少くとも或る水準の表現を為し得るだけの生来の資質を具えていた。彼はこの資質を基点として、彼の置かれた環境のそして彼自身の劣等性を消滅させようとした。彼が意識的に自己の劣等性を消滅させる手段として『抱朴子』に見られる様な思想表現を為したとまで考える必要はないが、彼の中に存する自己主張意識は、自然と劣等性消滅の方向へ彼の資質を駆り立てたに違いない。そこで先づ彼は、世俗的価値観の逆転をその思想表現としたのである。何故なら、彼の存在を彼の意識している如く位置付けるものは、世俗的価値観だからである。一般に人間が価値ありと認めるものは、自己をより高次な生存段階に齎らすことを予想せしめるものであろう。葛洪にとっては、世俗人と同じ価値対照を求めることは、彼を敗北者たらしめることであった。そこで彼は新しい価値観の世界を標榜し、その世界に自己を位

置付けることによって、自己の高次の生存段階が存すると考えたのであった。かくして、第一章に述べた如き逸民の考え方や生活態度は、学問的資質を十分具えながら世俗人の追求して止まぬ利祿・爵位を価値なきものと斥け、現実の社会に力強く背を向けるものであるが故に、葛洪には賞讃さるべき存在として把握されたのであった。

扱て以上は、第一章の逸民存在を賞讃する思想の根底に存するのは、葛洪の敗北意識であったことを論じたのであるが、これのみでは葛洪の逸民は十分理解できない。それは、若しも彼にその敗北意識を撤去する様な高位の仕官の途が開かれたなら、彼は逸民である必要はなかった筈だと思われるのに、自叙等からも窺われるように、彼は度々、高位に挙げられる機会に遇っているけれども、それを受け入れようとはしていないからである。そこには、学問者として自己を位置付けた葛洪が、人生と社会に関して得た新しい自信と自負が存していたし、有限なる生命を持つ存在として人間を把握した葛洪の深い洞察の眼が輝やいていたからである。以下、これらを究明してゆく。

(3)

嘉遯篇に依れば、公子は懷冰先生に対して、優能な資質は是非政治の場に活用されなければならないと迫っているが、先生は

以位極者憂深、故背勢利而無餘疑

と述べている。こゝに見られる如く、逸民が世俗の価値観を逆転する今一つの原因は、利祿・爵位を持つ存在の仕方が自己を危機に導くことになると考えている点にある。このことは同篇の先生の言に見える

蓋至人無為、棲神冲漠、不役志於祿利、故害辱不能加也

を見ることに依って一層明確にされることである。要するに、逸民であることを志向することは、葛洪に於いては、彼の生きた時代・社会に対する危機回避、即ち保身の一手段であったのである。彼が生きた三世紀末の西晋社会の状況を見れば、⁽¹³⁾ 彼がそのような生き方を持つに至った理由は明確にされるであろう。特に暗愚の主恵帝を中心に惹起された帝室の混乱と権勢者の目まぐるしい

登場と没落には著しいものがある。恣まなる権力を誇った楊駿一派は、賈氏の専横下に消え去り、賈氏一族の権力の下では縦横の働きをした名臣張華や裴頠等、さては石崇等も、趙王倫を中心とする孫秀等の出現と共に抹殺される運命を辿らねばならなかったし、その孫秀や趙王倫でさえも、八王の乱が激烈化した際には敢え無く敗退してしまうことになった。西晉王朝が滅亡に向う大きな流れの中で、人間の持つ権力への意志等は一介の塵にも比敵し得なかったのである。葛洪は卷一に於いては、此等の人物に直接言及してはいないけれども、例えば審拳篇等にも、後漢靈獸時代の腐敗した官吏登用制度を批判して、

中正吏部、竝為魁僧、各責其佞、

と述べているが、これ等も実際は中正制度盛行の晋代のことを間接的に表現しているものと考えられるように、政治に深く関係したが故に悲業の死を遂げた春秋時代呉の要離や衛の子路等を取り上げて、

豈上智之攸取哉、

と言っているのも、先掲の如き当世の権勢者を、暗に例としているものと考えてよいであろう。この様な不安定な政局を目前にしては、洞察の力優れた人間ならば、自己の安全保身を慮って、身を退けて在ろうとするのは当然と考えてよいであろう。即ち葛洪が

蓋徹鑒所為寒心、匠人之所眩惑矣、(嘉遯)

と述べる如くである。

或る意味では、自己の保身に汲々たる一生を送った王戎等は、政変に対峙する人物の中でも、最も要領を心得た人物と言うべきで、晋書本伝に依れば、

戎偽棄筮、墮而得不及禍、戎以晋室方乱、慕遽伯玉之為人、与时舒卷

とある様に、身に降り懸かる危険を上手に躲していたのである。後に竹林の七賢と呼ばれた人々の一人として世人に見せた態度等は、明敏なる彼の一種の方便であったろうし、阮籍から、

俗物已復来、敗人意、(晋書・卷四十三)

と言われたりしたのも故なしとしない。さればこそ、悲運に死する権勢群をしり目に、七十二歳もの高齢を全うし得たのであった。この様な社会に在って、

王戎の抱いた危機感とは本質的に異なるかも知れないし、実際その在存の仕方も本質的に異っていたが、葛洪の抱いた対社会的危機感が、

蓋祿厚者責重、爵尊者神勞、(嘉遜)

という様に表現されても少しも不思議はないのである。

卷二に出て来る逸民も、

吾幸生於堯舜之世、何憂不得此人之志乎、

と述べて、安泰の世に生まれて来ていたなら、逸民的生活信条の中に見られる社会的態度も持つ必要がないことを暗示しているのである。これ等に依っても、逸民が、政治への不信、不安に対する防衛機制として、自己の存在方法を規定していることが明らかにされるであろう。かくして卷三十五の潜居先生は、

又処瘠則勞、勞則不学清而清至矣、居沃則逸、逸則不学奢而奢来矣、清者福之所集也、奢者禍之所赴也、福集則雖微可著、雖衰可興焉、福赴則雖強可弱、雖存可亡焉、

と述べ、禍の至らぬ様な生活は奢に心を奪われない所、即ち文化果てたる瘠土の自然環境に在ることを教えているし、卷三十六の楽天先生は、

今海内瓜分、英雄力競、

を前提として、

明哲消禍於未来、知士聞利則慮害、

であること説き、

夫藏多者亡厚、好謙者忌盈、

として、軽々しく立ち出でないことが肝要であることを述べ、保身の要を顯示しているのである。更に卷四十九の玄泊先生は、

於是奉老氏多敗之戒、思金人三緘之義、

と述べ、黙することに依って自らの資質を表現せず、社会との交渉を断つのであるが、それは、

好劇談者、多漏於口、

ということを思慮しての上のことである。この点に関しては、自叙や交際篇に述べられる様に葛洪自身そのまゝの生活信条でもあったし、それは⁽¹⁴⁾

口実為之、枢機之發、榮辱之主、三緘之戒、豈欺我哉、
自謂、有端晏之捷、過人之辨、而不悟、斯乃招患之旌、召害之符、佞非之
馭、傾身之車也、(以上、疾謬)

等と述べられる如く、自分の考えを軽々しく表現することで危害を受けることをしまいとする保身の一表現でもあったのである。

以上逸民的存在は一種の保身の手段であったが故に、葛洪の思想表現の中で大きな役割を持ったことを示した。

(結 び)

この稿では、紙数の制限上、逸民の姿とそれを支える論理についての二つの面、即ち葛洪自身の持つ劣等意識から、世俗的価値の逆転された世界に住む逸民が取り上げられたことと対社会的危機回避としての保身手段から社会と交渉を持つまいとする逸民が取り上げられたことを論じるに止まってしまったが、後者は更に人間の持つ感覚器官の欲望の面からも論じられなければ十全ではない。そしてこの点にこそ、内編の神仙求道者の姿は浮かび上って来るのであるが、以下の過程は続篇として他の機会を待って発表し度い。(未完)

注

- (1) この他、時籟・貴賢・名実・循本・知止・窮達等も逸民に就いて論ずる箇所がある。
- (2) また、「祕六奇以括囊、含琳琅而不吐、」(嘉遯)と言う
- (3) 崇教篇に、「節治之術、莫良乎学、」とあり、『荀子』性惡篇に、「古者聖王、……以矯人之情性而正之、以擾化人之情性而導之也、」とある。
- (4) 勸学篇に、「舒竹帛而考古今、則天地無所藏其情矣、況於鬼神乎、而況於人事乎、」とあり、『易』恒卦・彖伝に、「觀其所恒、而天地萬物之情可見矣、」と見えている。
- (5) この点で、葛洪の逸民は、伝説上の許由や巢父等とは本質的に異なる。
- (6) 「昔魯哀傭主也、而仲尼上聖、不敢不尽其節、」(任能)等でも見えるように、葛洪は、君主とその補佐は為政推進の二大要素と考えている。また官理篇では、「夫君猶器小物大、不能相受矣、」とも見える。
- (7) 釈時論に、「談名位者、呂詔媚附勢、拳高譽、因資隨形、至乃空囂者、以泓增為雅量、

- 瓊慧者、呂淺利為鎗鎗」と見え、錢神論には、「失之則貧弱、得之則富強、……錢多者
処前、錢少者居後、」と言う
- (8) 御手洗勝訳『抱朴子』外篇簡注(-)・付・下見編の葛洪略歴を参照されたい。
- (9) 吳失篇に、神仙術の師鄭隱の言をかりて、「將見吳土之化為晉域、南民之變、成北隸
也、」と言う。
- (10) 宮川尙志氏の『『六朝史研究』政治・社会篇・頁三五四・「晋代の寒門」参照。
- (11) 『論衡』と『抱朴子』の関係に就いては、大淵忍爾氏の『道教史の研究』抱朴子研究
の、論衡・潛夫論と抱朴子の項に詳しい。
- (12) 自叙に、「洪既著自叙之篇、或人難曰、昔王充年在耳順云々、」とあり、論衡篇では全
面的に王充を取り扱っている。
- (13) 安貧篇に、「今海内瓜分、英雄力競、象恭滔天、猾夏放命、鷲蹇星馳以兼路、豺狼奮
口而交争、当途投袂以訟屈、素士蒙塵以履徑、」と言う。
- (14) 自叙に、「不得其人、終日默然、洪自有識、以逮將老、口不及人之非、」とあり、交
際篇に、「余……殊不喜朝襲、」と見える。

(広島大学院博士課程)

Kê-hung's (葛洪) Thought about Hermits (逸民)

Takao Shimomi

The book, 'pao-p'u-tzu' (抱朴子), written by Kê-hung early in the 4th century is separated into the front part (前編) and the latter part (後編). One tells us how to be a Shên-xian (神仙), and the other tells us about the advantages and disadvantages of social life chiefly. This article shows the first step on studying Kê-hung's thought which consolidates both parts of his book.

Author, taking Kê-hung's thoughts about hermits out of the latter, tried to catch the originality which supported his thought and also thought of the relations between Kê-hung and his era.

Hermits held a creed to live in the world which reversed general values. What Kê-hung admired them for living in the world of hermits means that he was a defeatist toward the actual phases of human life, in which he had to change the standard of value fundamentally in order to recover his conscience of defeatism, and he believed it was one best way for avoiding the crisis of social organization to live as a hermit. This article consists of two points in the above

statement.